

「富士山に星の雨が降った日」

・不安と期待の観測前

2001年11月18日午後、小雨の降るなか、厚くたれこめた雲を見つめながら我々は夜を待っていました。33年に一度の大出現が空振りに終わってから2年。「またダメだろう」というあきらめの気持ちと同時に、「今年は大丈夫」と思わせる予感がありました。デビッド・アッシャー博士。ヨーロッパでの大出現を予想し、的中させた人物です。その人が日本での大出現を予想しました。期待は高まります。この2年の集中的な観測で、流星

群に関する研究は大きく進んだと聞いています。が、我々アマチュアの興味はただ一点。「自分の目で流星の雨が見たい!」です。速い異国の上空に降った流星を、高感度カメラで捉えた映像を見ても、ただ、歯がゆいだけなのです。そして我々はまたやってきました。凍てつく11月の富士山に。

さて、富士山には様々なスタイルのアマチュアが集まりました。とりわけ写真を撮ろうという人が多く、悪天候にもかかわらず、午後の早い時間から陣取り合戦が始まっています。タイミング良く今年も新月。この日のために厳選した機材を抱えて、じっと晴れるのを待っています。流星を写野に捉えるには、どこに流れてもカバーできる超広角レンズが有利です。しかし、視野が広すぎると、今度は流星自体が針で引かいた跡のように小さくなってしまいうため迫力ができません。また、かなり明るい流星でない限り写りません。そこで多くのアマチュアは「下手な鉄砲、数打ちゃ当たる」作戦をとります。集められる限りのカメラとレンズを揃え、カメラ三脚、経緯台、赤道儀と、とにかく足のつ



へたな鉄砲、数打ちゃ当たる。これでもひとり分の機材です。3台の架台に積めるだけカメラを積みます。流星写真を撮る典型的なスタイルです。

いた物に可能な限り載せて、あらゆる方向をカバーしようとするのです。一方で、もっと大胆なことを考える人々もいます。撮影焦点距離1,000mm. 通常、星雲・星団を撮影する光学系を使用し、その写野に流星を捉えようというのです。普通の流星群でこんなことを試みても、単なる時間の無駄でしかないのですが、獅子座流星群が予想通りの出現をすれば、あながち無謀な挑戦とも言えなくなるのです。

忙しく準備を進めるうちに日が落ちました。霧はようやく晴れ始めたものの、まだまだどちらに転ぶか分かりません。一度は機材を据えつけたものの、長野方面が晴れているという情報を聞いて移動する人も出はじめました。みんな焦っています。そんなとき、アメリカからニュースが飛び込んできました。予想以上の大出現。星の雨は確実に我々に接近しつつあるのです。胸が高鳴ります。そして、いよいよ日が変わろうかというとき、一本の大流星が天空を駆けぬけました。今、思えば、これが世紀の天体ショーのオープニングだったのです。



荒地に点在する望遠鏡。眼前に美しい山々がそびえていますが、設営地の一歩先は崖です。

・ It's Showtime!

午前2時。我々の頭上はすでに大出現の予感に満ちていました。夜半過ぎから、頭上を通過する何本もの大火球。いったんは雲に覆われたものの、突然晴れわたった夜空。そして、徐々に高度を上げつつある輻射点。否が応でも期待は膨らみ、それは次第に歓声に変わっていきました。第1極大予想時間が近づくとつれ、予想通り、いや、それ以上のペースで星が流れてゆきます。輻射点高度はまだ東の空40度ほど。西にそびえる富士山に、頭の上を通り過ぎた流星が突き刺さります。群流星は、輻射点から遠いほど軌跡が長くなるため、それはナイヤガラの滝さながらの風景です。最初、流れるたびに「おーっ」「おーっ」とあがっていた歓声は、すでに「おおおおお〜〜〜」という叫びに変わり、まるで山全体がうなっているように聞こえます。普通の流星観測では、空を数パートに分けて担当を決め、かけ声は「はいっ!」もしくは「シュート!」など、どのパートに何個の流星が流れたかを記録します。また、このとき、観測者は流星の出現位置(通常、星座で指定)、等級、

群かそうでないかを報告するのですが、その意味では、この獅子座流星群は難物でした。普通の流星群の場合、別パートで大流星が流れて悔しがるといった光景が見られるものなのですが、今回は、他のパートを気にしている余裕がないくらい流れてしまったのです。よほどの大人数を動員しない限り、記録など出来るはずありません。FM電波観測でも、個々の流星の識別は難しかったのではないのでしょうか? さて、あちらこちらで忙しくシャッターを切る音が響くなか、皆、こう考えていたと思いま

す。「第1極大予想時間と第2の間は30分以上ある。その間に一休みして、フィルムの入替えをやる」と。しかし、この計画はもろくも崩れ去りました。流星が止まらないのです。興奮を引き連れたまま、第2極大予想の時間を迎えます。輻射点が高く昇るにつれて、短い流星が増えてゆき、同時に、密度も濃くなってゆきます。信じられない光景です。延々と星が流れ続けるのです。同時に数本流れるのも珍しくありません。ふと気がつくと、まわりに声はありませんでした。皆、食い入るように夜空を眺めています。そして、写真を撮る者は気がつきました。「これならば構図を考えて写真が撮れる」。流星写真は運次第です。構えたところに流れなければそれで終わりです。しかし、今夜はどこを見ても流れています。沈むオリオンとともに。昇る北斗とともに。どこへレンズを向けても、ちょっと待てば火球が飛び込んできます。あとは、気に入った流星が流れたところで露出をやめるだけ。なんと幸せな夜でしょう。時計を見るとすでに4時をまわり、永遠に続くかのように思われた天体ショーも、ついに終わりの時を迎えようとしています。

・祭りの後

世紀の天体ショーの終わりを告げる太陽がゆっくりと、しかし確実に地平線の向こうに迫ってきました。次第に光を失ってゆく星々。すでに天の川は紫紺の空に呑み込まれてしまいました。今日は月曜日。ゆっくりしていただける幸せな人ばかりではありません。ある人は満足感とともに、またある人は時間に追われて山を下りてゆきます。しかし、心残りはないでしょう。我々は、それを体験したのです。機材を片付けながらふと空を見上げて驚きました。なんと、まだ流れています。すでに朝焼けに染まりつつある空を、何本もの閃光が切り裂いてゆきます。まるで、別れを惜しむように。まるで、30年後の再会を約束するように。

記事の依頼を受けて、掲載用に14枚合成に挑戦したものの、思いのほか時間がかかってしまい、投稿が遅くなってしまいました。天文業界で仕事をしておりませんが、デジタル画像処理技術は確実にアマチュア天体の世界にも浸透しており、観賞用天体写真の画像処理もあたりまえとなっています。ひと昔前には考えられな



「輻射点」. 5分露出14枚コンポジット. 撮影：武井伸吾氏



「富士に降り注ぐ星の雨」. ※合成したイメージ図です。1発は本物ですので、輻射点方向は合っています。

ったような高度な写真が、個人の手で、思いどおりに仕上げられる時代が近づいているのを感じます。

宮崎淳一 (株) 誠報社)